

# 講史小説と歴史書（2）

——『残唐五代史演義』、『南宋志伝』の構造と変容——

上 田 望

## 第4章 『残唐五代史演義』と英雄物語

### 第1節 『残唐五代史演義』の構成

### 第2節 『残唐五代史演義』の基づいた歴史書

### 第3節 『残唐五代史演義』の編集者楊麗泉

小結

## 第5章 趙匡胤物語の演变——『南宋志伝』、『飛龍全伝』よりみた——

### 第1節 『南宋志伝』と『五代史平話』

### 第2節 『南宋志伝』の基づいた歴史書

### 第3節 『南宋志伝』と『飛龍全伝』

小結

## 第4章 『残唐五代史演義』と英雄物語

### 第1節 『残唐五代史演義』の構成

唐が崩壊した後をうけて北方中国では中原に鹿を逐う戦いが展開され、その中で後梁・後唐・後晋・後漢・後周と王朝がめまぐるしく交代した。こうした乱世こそ講釈師にとっては格好の題材となる。宋代においてこの五代の歴史を語る「説五代史」は「説三分」と肩を並べる人気の演目であっただろう。また、演劇でも雑劇に元関漢卿『鄧夫人苦痛哭存孝』雑劇（脈望館明抄本）、元陳以仁『十八騎誤入長安』雑劇（存二曲）、『飛虎谷存孝打虎』雑劇（脈望館明抄本）、無名氏『李存孝大戰葛從周』雑劇（佚）、無名氏『壓觀樓疊掛午時牌』雑劇（脈望

館明抄本), 無名氏『李嗣源復奪紫泥宣』雜劇(脈望館明抄本), 元白樸『李克用箭射雙雕』雜劇(存一套), 無名氏『朱全忠五路犯太原』雜劇(佚), 無名氏『狗家瞳五虎困彥章』雜劇(佚), 元周文質『敬新磨戲諫唐莊宗』雜劇(佚)などの演目があり, いかに五代の話が通俗文学の世界では好まれていたかが知れる。五代史を題材にしている小説では, 宋代に成立し元人の手が入っているとされる『五代史平話』(以下、『平話』と略す), そして明代の『残唐五代史演義』(以下『演義』と略す)が伝存している。『残唐五代史演義』の版本については以下の通り。

① 鐫李卓吾批点刊本 8巻 60則

A 10×20 明?刊本

【台湾中央図書館】

B 9×20 図 16葉 明末?周之標序刊本

【北京図書館, 天理図書館など】中国書店の影印本があるが, どのテキストに據って影印したかは不明。また, 『古本小説集成』第2批にも復旦大学図書館蔵本に拠った影印本が収められる。○周之標は『新刻出像点板増訂楽府珊珊集』(明末刊本)の編者である。

② 玉茗堂批評刊本 6巻

『明清善本小説叢刊』所収の影印本はどこにこのテキストに據って影印したのか不明。○6巻本は清刊本のようなものである。

今回は, 中国書店影印本(版式から見て恐らく北京図書館蔵本)と『明清善本小説叢刊』所収の影印本, そして宝文堂書店の排印本(1983)を参照しながら論を進めていく。

『五代史平話』と『残唐五代史演義』との比較は, とりわけ『残唐五代史演義』について論じる際に避けて通れない問題であり, 『残唐五代史演義』についての先学の論考では必ず触れられている。橋本堯氏は, 『残唐五代』と『五代史平話』を比べ両者の違いを次のように指摘する<sup>(1)</sup>。

① 全体の構造の違い 『五代史平話』は章回形式ではない。

② 情節の違い

『残唐五代』になくて『五代史平話』にある話……朱全忠、石敬瑭、劉知遠、郭威の出身に関するいきさつなど。

『五代史平話』になくて『残唐五代』にある話……「五龍」が王彦章を殺す話、後唐の廢帝が永寧公主を虐待したことから石敬瑭の叛乱をまねく話。

③ 描写の違い 『五代史平話』には武將の戦闘場面が描かれていない。

以上から橋本氏は、「『五代史平話』と『残唐五代』の共通性は、同じ歴史時代を題材にしたということのほかには、黄巢の取り扱いに類似性が見られるだけで、その点を除けば両者は別系統といつてよいほど異なっている。」と結論づける。『五代史平話』は宋代の講史書ともいわれ、『残唐五代史演義』の底本であっても何の不思議もないのだが、この両者は橋本氏が分析するように異質な部分が多く、多少似ているのは黄巢の物語くらいであり、『残唐五代史演義』の作者はどうも『五代史平話』を読まずしてこの作品を書いたらしい。『五代史平話』は、正史などに基づいて書かれたものといわれ、年月日を細かく記し史実を述べることに主眼を置いているために、魅力的な登場人物を創出できていない。ここでまず『五代史平話』がどのような歴史書に基づいているのかを見てみよう。『五代史平話』を大まかに検討してみると、黄巢の物語を除く大半の叙述が『通鑑』系史書の引用によって構成されている。





元雜劇は『残唐五代史演義』の故事を題材に作られたと考えたのであるが、これについて川島郁夫氏は各地に分散している故事がそれぞれ戯曲小説に発展していった可能性もあると反論している<sup>(3)</sup>。この問題について黑白をつけることは難しいようだが、少なくとも『残唐五代史演義』はその全てが個人によって作り出された小説ではなく、比較的古い李存孝の英雄物語を母胎にしていたと考えられる。橋本氏はまだ『成化説唱詞話』の発見されていない当時、『全相平話』を手がかりに李存孝の風貌やその死の方に着目し、これは『三国演義』や『西遊記』などに発展していく前の段階の英雄物語ではなかったかと推測された。その後金文京氏、大塚秀高氏、小松謙氏などの研究によってこれが古い講唱文学や戯曲の英雄物語にかなり普遍的な構造であることが明らかになり<sup>(4)</sup>、橋本氏の推測の正しさが証明されたように思われる。筆者が『残唐五代史演義』に目を通して気付いたのは、この中の巻6に「一按東方甲乙木……」に始まる表現があることである。これは「五方兵馬」と呼ばれる古い儀礼の一種に由来するもので、『成化説唱詞話』にも見られる。これから、李存孝の物語を唱い語る芸能がかつて存在し、それが小説の成書に大きな役割を果たしていたのではないかと考えられる。そのような芸能の起源は宋元時代にまで遡れるが、ただしそれが宋元間に『全相平話』のような散文体の小説になっていたかはまた別の問題である。しかし、現在残っている『残唐五代史演義』よりもはるか前に小説ができていたことは次の記事からうかがえる。

『金統残唐記』は黄巢の事を載せること甚だ詳かなり。而して中間に極めて李存孝の勇を誇り、復た其の冤を称す。此の書を為りし者、全て存孝の為に作り。後来の詞話、悉く此に倣む。武宗南幸し、夜忽と『金統残唐記』善本を取る旨を伝え、中官に重値で之を購わしむ。肆中一部を五十金に售れり。今人『三国』『水滸』を耽嗜して『金統』を伝ず、是れ未だ嘗て其の書を見ず。(錢希言『桐薪』巻3)

武宗の在位は正徳年間(1506～1521)であるから、『三国演義』の嘉靖本より

も前に既に李存孝の物語は『金統残唐記』という名で小説化されていたのである。この『金統残唐記』がその後姿を変え『残唐五代史演義』になったと見て差し支えなからう。

## 第2節 『残唐五代史演義』の基づいた歴史書

『残唐五代史演義』はその構成について一つの謎があった。『残唐五代史演義』は唐末から五代の歴史を取り扱っている小説の筈だが、現在我々の目にする『残唐五代史演義』は、唐末黄巢が叛乱を起こしてから李存孝・李克用らが死ぬまでを重点的に描き、後半に登場する後晋の石敬瑭、後漢の劉知遠、後周の郭威の段などは非常にあっさりとしている。しかし、李存孝・王彦章の死後に主役を張れるような英雄がいなかったわけではない。石敬瑭は『成化説唱詞話』の『石郎駙馬伝』、劉知遠は『劉知遠諸宮調』・『白兔記』のヒーローであり、俗文学の世界では知名度の高い英雄たちだったのであり、彼らを軽く扱っている『残唐五代史演義』は、橋本氏の言葉を借りれば明らかに「作品の密度そのものが不均衡」なのである。趙景深氏はこれをあたかも諸葛亮が死んだ後のように、王彦章の死んだ後は新たに英雄像を作り上げる気持ちが失せてそそくさと小説を終わらせてしまったのではないかと推測している。橋本氏も、『残唐五代史演義』の主要部分が李存孝という一人の英雄の活躍によって構成されていることから、彼の死によって物語自体が終わりに近くなったと見ているようである。一方、大塚氏は趙・橋本両氏と若干見解を異にする。大塚氏は、作者にとっては、『残唐五代史演義』はあくまでも後唐正統史観に立つ残唐の時代を語るべきものであり、後唐の滅亡以下の部分は蛇足のようのものであったからだとする。趙・橋本説、大塚説、ともに首肯できるものであり、現時点でそれを否定できる根拠は何もないのだが、筆者はもっと単純なところにこの「不均衡」の理由があるのではないかと考える。現在の『残唐五代史演義』の李存孝中心の筋運びからして、もともとこの小説は李存孝の死か、よくても王彦章の死あたりで

終わっていたのではないだろうか。

『成化説唱詞話』を見ても五代史の説唱は『白兔記』・『石郎駙馬伝』などのように英雄中心主義であり、李存孝物語の説唱やそれに基づいた原『残唐五代史演義』（恐らく『金統残唐記』）も必ずしも五代史の故事をまんべんなく語ってはいなかったに違いない。そのような推測を裏付ける証拠として、『残唐五代史演義』の巻6以降が単に「不均衡」なだけでなく、文章自体が巻6以前と異質なことが挙げられる。これは従来注目されていなかったことであるが、荒唐無稽な英雄物語とされる『残唐五代史演義』にも実は史書が引用されているところがあり、その殆どが実は巻6以降に集中しているのである。それでは『残唐五代史演義』の歴史書と関連のある部分を史評・総評、本文の順に見ていくことにしたい（詠史詩は次節で論ずる）

表1 『残唐五代史演義』の主な評注一覧

回	題名	典拠
①	1 按宋待制孫甫史記	待考。
	※ 『陸氏通鑑』、司礼監刊本『節要』、『李氏綱鑑』、『黃氏綱目』には見えない。	
②	20 卓吾子評	『綱目』巻51 發明
	※ 『李氏綱鑑』巻26にもある。ただし『李氏綱鑑』の方が『綱目』よりずっと簡単になっている。なお、『綱鑑合編』ではこれを「書法」とするが、文字は『李氏綱鑑』と同じ。	
③	25 後宋孫甫評云	待考。
	※ 『陸氏通鑑』、司礼監刊本『節要』、『李氏綱鑑』、『黃氏綱目』には見えない。	
④	44 史官評	『綱目』巻56 胡致堂評
	※ 『李氏綱鑑』、『黃氏綱目』にもある。	
⑤	44 卓吾子評	『綱目』巻56 書法（賀善評）
	※ 『李氏綱鑑』、『黃氏綱目』にもある。	
⑥	55 史臣断曰	歴年図評
	※ 司礼監刊本『節要』の歴年図評の前半部分。『李氏綱鑑』巻27。	



- |   |    |                        |               |
|---|----|------------------------|---------------|
| ⑦ | 55 | 卓吾子評                   | 『綱目』卷 57 胡致堂評 |
|   |    | ※ 『李氏綱鑑』卷 27 にも見える。    |               |
| ⑧ | 57 | 按史臣断曰                  | 歴年図評          |
|   |    | ※ 司礼監刊本『節要』の歴年図評の後半部分。 |               |
| ⑨ | 58 | 卓吾子評                   | 『綱目』卷 58 胡致堂評 |
|   |    | ※ 『李氏綱鑑』卷 27 にも見える。    |               |
| ⑩ | 59 | 史臣評曰                   | 歴年図評          |
|   |    | ※ 司礼監刊本『節要』に見える。       |               |
| ⑪ | 59 | 史臣断曰                   | 待考。           |
| ⑫ | 60 | 按五代史                   | 待考。           |

これにより興味深い事実が判明した。『兩朝史伝』もそうであったが『残唐五代史演義』も由緒正しい史評を「卓吾子評」として用いている（『兩朝史伝』では楊慎評とする）。卓吾子評で典拠が不明のものもかなりあるが、これらはオリジナルであろう。本文中の史評では、宋孫甫・宋胡致堂・歴年図（宋司馬温公）評などが使われているがやはり不明のものが若干ある。また、孫甫の評は『兩朝史伝』にも使われていたが、いずれも筆者が参照した『通鑑』のダイジェストには載っていなかった。

それでは次に本文の史書に拠る部分を検証してみる。

[例 2]

- |   |  |
|---|--|
| A | 却説唐主自即位以来，年已六十，每夕于宮中焚香祝天曰，某本胡人，因天下擾乱，為衆所推。願天早生聖人，為生民主。初無為帝之心，遭時多艱，邂逅得国。蒞政之初，内無聲色，外無游畋，不任宦官，廢藏庫之財，賞廉吏，治賊蠹，雖不知書，而所行暗合于道。年穀屢登，兵革罕用，較于五代，名為小康。 |
| B | 是年長興四年秋八月，唐主染疾甚重。秦王從榮入内問疾，唐主低頭不語。從榮見唐主病勢已危，遂抽身出外。行不数歩，只聽得後面哭聲震外，從榮疑是唐主殂了。恐不得為嗣，次日遂称疾不朝，密与其党設謀，欲帶兵入侍，先制權臣。……………                             |
| C | 史官評曰，明宗美善頗多，過亦不至于甚，求諸漢，唐之間，蓋亦賢主也。觀   |



於五代，粗為小康。

C 胡致堂曰，明宗美善頗多，過舉亦不至×甚，求於漢，唐之間，蓋亦賢主也。其猶足稱者，內無聲色，外無游畋，不任宦官，廩內藏庫，四方所上物，悉歸之有司，褒賞廉吏，嚴治賊蠹。故雖四方未平，而中土綏靖，享屢豐之報。若輔相得賢，則其過舉當又損矣。其焚香祝天之言，發於誠心。天既厭亂，遂生聖人。用是觀之，武丁恭默思道，夢得傳說，周公納策金縢，武王疾瘳，天人交感之理不可誣矣。

E 賀善贊曰，明宗不以位為樂，綱目於其得國無譏辭，即位數年，善多可紀。××××××××××××××××××××××××××五季之君，若明宗××者，亦可謂賢主矣。（『李氏綱鑑』卷 27 五代紀唐明宗）

表 2

残唐五代	A	B	C (胡致堂)	E (賀善)
通鑑	B	A	×	×
綱目	B	A	△	△
通鑑纂要	B	A	×	×
黃氏綱目	B	A	△	△
姜氏綱目	B	A	△	△
陸氏通鑑	B	A	×	×
通鑑節要	A	×	△	×
李氏綱鑑	A	×	○	○
湯氏綱鑑	A	×	○	×
鍾氏綱鑑	A	△	○	×
王氏綱鑑	A	×	○	○

全ての例を挙げるのは煩瑣に過ぎるので、二つの系統の特徴がはっきり現れている『綱目』と『李氏綱鑑』を例に挙げ、その他の書については表にまとめ整理するに留めた。

これらの例を見ると、現在の『残唐五代史演義』が『通鑑』のダイジェスト

に拠っていることは一目瞭然である。最大の違いはA・Bの地の文のところ、『通鑑』から『陸氏通鑑』までいずれも小説とは異なりB・Aの順に叙述されているのに対し、『節要』から『王氏綱鑑』までみなBの話が省略されている点であろう。小説のAの叙述をよく見ると、傍線を引いた個所は恐らく胡致堂の評に基づいていると考えられる。ただ、『綱目』系諸本が載せる胡致堂評と『李氏綱鑑』などの『節要』系『綱鑑』諸本が載せる胡致堂評には若干の異同があり、傍線部は『綱目』の胡致堂評の方により近いので、小説のAは『綱目』系統の書に拠っていると思われる。また、Bの話柄は『節要』系諸本にはなく、僅かに『鍾氏綱鑑』に「唐主疾病，秦王從榮作乱伏誅」という綱があるのみであり、ここも明らかに『綱目』の記述を下敷きにしているとみられる。次にCであるが、これは胡致堂評を用いて作っている。胡致堂評について『綱目』と『節要』系『綱鑑』との間に異同が見られること既に述べたが、では小説のCがどちらの系統に近いかという点、『綱目』ではかなり文字が削られており、こちらに関しては『綱鑑』所載の評が用いられていたようである。Dの部分の二首の詩は、明らかにその胡致堂評を踏まえて詠まれたものであろう。そして、最後に李卓吾評のEがあるが、これは「通鑑綱目書法」の引用であり、『綱目』をはじめ、『李氏綱鑑』、『黄氏綱目』など『通鑑』のダイジェストには普通に見られるものである。ここでも『綱目』と『李氏綱鑑』では文字に異同があり、小説のそれは『李氏綱鑑』に近い。

これらの結果を総合すると、小説はA・Bの個所は『綱目』系統諸本、C・Eに関しては『節要』系『綱鑑』に拠っていたということになる。どうしてこんな複雑なことになっているのかという問題はさておき、いつ頃これらの評が加えられたのであろうか。李卓吾評が流行し始めたのは万暦30年前後といわれているから、この偽評が『綱鑑』の諸家の評などを参考に作られたのもそれ以降に相違あるまい。またDの逸狂詩を詳しく検討すると、『綱目』の胡致堂評にはなく『綱鑑』の評にのみ見える字句「褒」があり、この他の逸狂詩も偽評

と呼応しているものが少なくなく（第27・29・60回など）、評が加えられた時点でかなりの詠史詩が増補されたとみてよいであろう。

さて、もう一例検討してみたい。

[例3]

周主戒 曰、昔吾西征之時、見大唐十八陵、無一陵不遭廢掘者。此無他、惟多藏金玉故也。我死後、当衣以紙衣、斂以瓦棺、×××、×××××、壙中無用石、以甃代之、工人役徒、皆和雇、勿使勞役百姓。既葬之後、募近陵之民三十戶、蠲其雜徭、使之守視。勿修下宮、勿用 宮人、勿作石羊、石虎、石人、石馬、惟刻石置陵前云：周天子生平好 約、遺命用紙衣瓦棺、嗣天子不敢違也。汝違吾言、吾不福汝矣。（『殘唐五代史演義』59回）

屢戒榮 曰、昔吾西征 , 見 唐十八陵、無 不 發掘者。此無他、惟多藏金玉故也。我死 , 当衣以紙衣、斂以瓦棺、×××、×××××、壙中無用石、以甃代之、工人役徒、皆和雇、勿 以煩民。 葬畢 , 募近陵 民三十戶、蠲其雜徭、使之守視。勿修下宮、 置 宮人、 作石羊、 虎、 人、 馬、惟刻石置陵前云：周天子平生好儉約、遺令用紙衣瓦棺、嗣天子不敢違也。汝或吾違 , 吾不福汝 。（『綱目』卷59）

帝屢戒晉王曰、昔吾西征 , 見 唐十八陵 無 不 發掘者。此無他、惟多藏金玉故也。我死 , 当衣以紙衣、斂以瓦棺、速營葬、勿久留宮中、壙中無用石、以甃代之、工人役徒、皆和雇、勿 以煩民。 葬畢 , 募近陵×民三十戶、蠲其雜徭、使之守視。勿修下宮、勿置守陵宮人、勿作石羊、 虎、 人、 馬、惟刻石置陵前云：周天子平生好儉約、遺令用紙衣瓦棺、嗣天子不敢違也。汝或吾違 , 吾不福汝 。（『通鑑』卷291 後周紀2 太祖顯德元年）

帝屢戒晉王曰、昔吾西征 , 見×唐十八陵 無 不 發掘者。此無他、惟多藏金玉故也。我死 , 当衣以紙衣、斂以瓦棺、速營葬、勿久留宮中、 勿置守陵宮人、勿作石羊、 虎、 人、 馬、惟刻石置陵前云：周天子平生好儉約、遺令用紙衣瓦棺、嗣天子不敢違也。汝或吾違 , 吾不福汝 。（『通鑑詳節』卷99）

小説と『通鑑』・『綱目』・『通鑑詳節』を比較してみると、ここも明らかに『綱目』に近い。『通鑑』・『通鑑詳節』などには「速宮葬、勿久留宮中」という文字(傍線部)があるのに、小説と『綱目』ではそこが省略されている。『陸氏通鑑』は『通鑑詳節』と同文であるが、司礼監刊本『節要』、『李氏綱鑑』、『湯氏綱鑑』、『顧氏綱鑑』、『陳氏綱鑑』、『王氏大全』などにはこのエピソード自体がない。

『五代史平話』も一応参照したが、平話は『綱目』の叙述を若干わかりやすい表現に改めてしまっており、『平話』を見たわけでもないようである。

以上の結果から考察すれば、『残唐五代史演義』は地の文に関しては基本的に『綱目』系統の史書に拠っていたということになり、これは『兩朝史伝』の改編と共通する。『残唐五代史演義』の巻6以降の不均衡については既に述べたが、改訂者は「残唐」ではなく「残唐五代」と銘うつために『綱目』や『石郎駙馬伝』の物語を参考に王彦章以降を書き足したのである。一方評の方は、前出の表1で明らかなようにその殆どが『綱鑑』にあるものであり、編集作業において地の文は『綱目』、評は『綱鑑』に拠るという明確な基準があったようである。

### 第3節 『残唐五代史演義』の編集者楊麗泉

この節では原『残唐五代史演義』の改編作業をおこなった人物は誰であったのかという問題を考えてみたい。そこでまず、『残唐五代史演義』に出てくる詠史詩について分析してみる。

表3 『残唐五代史演義』の主な詠史詩

	無名氏	逸狂	後人	古人	宋賢	史官	静軒	麗泉	先儒	後賢	曲木子
卷1	10	5	1		2						
卷2	8	5	4								2
卷3	5	6									
卷4	2	7	2			2	2				
卷5	4	5	3	2	2	1		1			
卷6	10	3				1		2			
卷7	2	2	3						1		
卷8	2	2						2		1	

この中で注目すべきは麗泉の詩が5首、周静軒（静軒先生としかないが）の詩が二首含まれていることである。麗泉の名は、三台館余象斗万曆34年刊『按鑑演義全像列国評林』8巻222則にも見え、大塚氏の統計に拠れば、その中には麗泉10首、静軒4首がある<sup>(5)</sup>。大塚氏は、「確かに評林A本に見える麗泉とこの楊麗泉とが同一人物である積極的な根拠は何もない。ただ、『列国志』に熊鍾谷・楊氏清白堂・麗泉・清白堂楊麗泉と並べれば、自ずと麗泉すなわち楊麗泉の結論が導かれよう。」とし、「熊鍾谷が東屏らの詩を挿入してできた原『列国志』は評林A本の巻8にあたる部分を欠くものだった（あるいは原『列国志』成立後その部分が失われたのかもしれない）。それを熊鍾谷とは別の『列国志』の编者、筆者はこの人物を楊麗泉と考える、が補うか、その備わる古いテキストを捜し出すかし、それ以前の部分とバランスをとるべく、この部に自身の“詠史詩”をはめ込むなどした。」という見通しを述べている。大塚氏の見通しが正しければ、麗泉詩のある『残唐五代史演義』は、楊麗泉と何らかの関わりがあることになり、そしてそれはこのテキストが福建建陽でも刊行されたことがある可能性を示唆しよう。では楊麗泉とはいかなる人物だったのか。先に述べたように万曆34年刊の『列国志』、そして万曆47年の『兩朝史伝』に彼の詠史詩があるのであるから、万曆30年から40年にかけて活動していた出版業関係者

であることは疑いを容れない。この他清白堂楊麗泉が出版した書物としては、次の二つが伝わっている。

A 二十四尊得道羅漢伝 6巻不分回

巻3題「撫臨朱星祚編」とある。撫臨は江西撫州府臨川県のこと。朱星祚については知見がない。封面には、「万曆乙巳(33年, 1605)年夏 書林聚奎齋梓」とある。聚奎齋については、『明代版刻綜録』の「聚奎堂」の条に『重刊巢氏諸病源候総論』50巻が著録されており、「明万曆歙県方東雲聚奎堂刊 目録後有“歙方東雲敬校对于聚奎齋”牌記」とある。巻1に「書林清白堂」の署があり、巻末牌記に「万曆甲辰(32年, 1604)冬書林楊氏梓」とあるので、万曆32年に楊氏清白堂の刻した版木を聚奎齋が流用して再版したものであろう。楊麗泉の名前はどこにも見えない。“有詩為証”が多用されているが、楊麗泉の詠史詩はない。上図下文で回を分かつたず、按語・評注一切なしのシンプルな本である。

B 新鏗全像達磨出身伝灯伝 4巻70則

巻3題「逸士朱開泰修撰」とある。朱開泰はいかなる人物か不明。巻4を除き、各巻頭に「書林清白堂楊麗泉梓行」と署されている。上図下文で、按語・評注は付されていない。

AとBはともに上図下文の貧弱なテキストである<sup>(6)</sup>。これから万曆30年前後、建陽に楊氏清白堂という書肆が存在し、その主人が楊麗泉であったことが裏付けられるであろう。清白堂の名前は後で触れる『大宋中興通俗演義』にも見えるので、恐らく嘉靖年間から活動していた書肆であり、楊湧泉清江堂と同族だったと考えられるが、AとBの書を見る限りでは万曆30年頃にはかなり落ち目になっていたらしい。一方この頃は建陽では余象斗三台館が隆盛期を迎えていたが、余象斗は楊麗泉の存在を意識し、目の敵にしていたふしがある。『列同志』の中で余象斗は何故か楊麗泉の詠史詩だけをこき下ろしているからである。例えば巻8の“潛王逃齊即墨”及び“范睢脱廁報仇”の詠史詩で、余象斗は楊麗泉詩についてだけ辛辣な批評をしている。後者を例にとれば、「俗人麗



泉詩韻一句，何等軟弱，此人未見有一首奇妙者，何故于七卷中一首復一首，今觀之甚厭。」のごとくである。『列国志伝評林』では楊麗泉詩は巻8に10首（龔紹山本では14首）が集中しており，そのことを批判したのであろう。余象斗は楊麗泉と殆ど同時代に建陽で活躍した同業者であり，余象斗は故意に麗泉の詩を削らず残しておいて痛烈な批評を加えたとみるのは穿ち過ぎであろうか。

ところで，現在の『残唐五代史演義』には巻内書題次行に「貫中 羅本 編輯」とあるが，これはどのように解釈したらよいのであろうか。鄭振鐸氏や趙景深氏は，早くからこの書に『三国演義』と似た情節が存在することに気付いていたが<sup>(7)</sup>，これは単に仮託ではないかと考えていた。一方，柳存仁氏は羅貫中作とされる『兩朝史伝』・『残唐五代史演義』・『水滸伝』・『三遂平妖伝』・『大唐秦王詞話』などを比較した結果から，『兩朝史伝』・『残唐五代史演義』はどちらも後人の改作を経てはいるもののまさしく羅貫中原本であると主張する<sup>(8)</sup>。更に柳氏は『残唐五代史演義』には『水滸伝』と共通する詩句があることを具体的に指摘している。しかし既に見たように『兩朝史伝』は羅貫中の原作ではなくて熊大木『唐書志伝』を楊麗泉が改作したものに過ぎず，『三国演義』と似ているのは『三国志伝』に表現を借りたためであることがわかっている。それから考えると『残唐五代史演義』もまた同じではないだろうか。次の例は，『残唐五代史演義』が『三国志伝』を模倣していることがよくわかる例である。

#### 〔例4〕

是日，晋王戴冲天冠，穿袞龍袍，玉帶珠履，正中而坐。諸將侍立左右。晋王令諸將比試弓箭，定下先鋒。將紅錦戰袍一領挂于垂楊之上，又設一箭垛離百步為界。衆將分為兩隊，十三太保穿紅，五百家將穿綠，各帶雕弓長箭，跨鞍立馬，聽候指揮。晋王伝令曰，如有射得三箭中紅心者，鳴金擊鼓以応之，即將紅袍賞賜，隨令挂先鋒印。晋王教諸將先射，

言

未竟声，紅袍隊中一將驟馬持弓而出，衆視之，乃是太保康君利。

把馬飛縱来往三遭，

搭上箭，扣滿弓， 放射一箭。……（中略）…… 晋  
 王叫衆將來試，只見綠袍隊中一將奮武而出，  
 衆視之，乃 副將夏日新也。 遂驟馬持弓看垛一  
 遭，第二番一箭正中紅心，金鼓齊鳴。日新呼曰，快取袍印過來。晋王曰，只此一  
 箭，未足以當此職。紅袍隊中一將飛馬出曰， 看我射來，顯  
 汝二人手段。拽滿雕弓，連射三箭，只有一箭 中紅心，衆皆喝采，乃四太保李從信  
 也。（『殘唐五代史演義』11回）

是日，曹操頂嵌寶金盔，身穿紅綉羅袍，玉帶珠履，凭欄而坐。文武侍立於台下。操  
 交先閱武官，比試弓箭， 使侍將將西川紅錦戰袍一領掛於垂楊之上，柳下設一箭  
 垛離百步為界。武官分為兩隊，曹氏宗族穿紅，外枝將士盡穿綠，各帶雕弓長箭，跨  
 鞍立馬，聽候指揮。操 伝令曰，如有射 中紅心者，鳴金擊鼓以應之，遂將紅  
 錦袍以賞之，不中者罰水一盃，能射者射之，不能射者聽令押陣。曹操問三声。声尤  
 未絕，紅袍隊中一人驟馬持弓而出，衆視之，乃 少年將軍，見統虎豹騎衛兵曹丞  
 相外房姪姓曹名休，字文烈。衆見曹休人馬精神，無不稱賀。休把馬飛縱來往三遭，  
 搭上箭，扯滿弓，觀紅心較射一箭正中。金鳴鼓響，操大喜曰，此吾家千里駒也。左  
 右却欲取錦袍去。 綠袍隊中一騎 出曰，丞相錦袍也，合賜外人先爭。汝宗族中  
 不宜攙越。衆視之，乃漢上降將文聘也。衆皆云且看文仲業射之。聘驟馬持弓看垛一  
 遭，第二番一箭正中紅心，金鼓齊鳴。 聘呼曰，快取紅袍 來去。  
 紅袍隊中一將飛馬出曰，小將軍先射，汝何奪之。看我 與  
 汝兩個解箭。拽滿雕弓， 一箭也中紅心，衆皆喝采，乃曹丞相從弟曹  
 洪也。（聯輝堂本『三国志伝』卷10）

『殘唐五代史演義』の文章の中で、IV群聯輝堂本『三国志伝』と共通する字句  
 がこれだけある。I・II群系統の『三国演義』もことそう異同があるわけ  
 ではないが、『三国志伝』の方が『残唐五代史演義』により近い。『兩朝史伝』と同  
 じように『残唐五代史演義』もIII群の『三国志伝』を参照していたことはほぼ  
 間違いない。ただし『残唐五代史演義』はもともと講唱文学から発展したもの  
 であり、『南宋志伝』の飛龍平話のように小説成立以前の段階で影響を受けて情  
 節が似てしまうことは当然ある筈であり、『三国演義』に似た情節が全てここに  
 挙げた例のように『三国志伝』を模倣したものとは限らない。また、『水滸伝』

と詩詞が共通するという点に関してもやはり『水滸伝』から楊麗泉が引用してきたと考えたくなるが、『水滸伝』の版本には未解決の問題もまだまだあるので、これについては『水滸伝』の専家の研究に待ちたい。

## 小 結

現在の『残唐五代史演義』が作られた経緯は次のようになるであろう。

原『残唐五代史演義』は恐らく講唱芸能が散文化されたもので、既に明武宗の時代には成立を見ていた。それは錢希言の証言からもわかるように、李存孝や黄巢を中心とした物語内容であつたらしい。五代の物語については先行する作品として『五代史平話』があり、当時もまだ残っていた筈であるが、この『五代史平話』は五代史の教科書のような書物で虚構の面白みに欠けており、『金統残唐記』はこれとは全く別個に成立したようである。この英雄伝奇的色彩の極めて濃い小説『金統残唐記』を少し歴史演義らしく改編したのが、建陽の書肆の主人楊麗泉であった。楊麗泉は万暦30年前後、王彦章の死んだ以降は尻切れトンボだった『金統残唐記』の後半を、『綱目』を用いて増補し、それと前後して『節要』系『綱鑑』の史評を適当に利用して偽の李卓吾評までつけ加えた。『綱鑑』を利用した評注を付す作業は詠史詩との絡みで楊麗泉本人が担当したと思われるが、『綱目』に拠る本文の増補は別の人間がおこなった可能性もある。楊もしくはそのグループが王彦章以後を史書で少し補っただけで劉知遠の物語を無視するなど、改編作業に本腰を入れなかったのは、先祖楊湧泉の出した熊大木『南宋志伝』に既にそれらの物語が含まれていたからかもしれない。熊大木が『南宋志伝』を後晋の石敬瑭から語り始めたのは、『金統残唐記』の李存孝物語を意識し、それと重複しないようにという配慮からだと思われるが、『金統残唐記』を『残唐五代史演義』に改めるにあたっては今度は逆に『南宋志伝』を意識せざるを得なかったのであろう。『残唐五代史演義』には当然詠史詩があり、その中には周静軒詩も含まれるが、それは『両朝史伝』の場合と同じく楊

が挿入したものであろう。そして楊は『兩朝史伝』・『残唐五代史演義』を「羅貫中編次」として羅貫中ブランドで売り込むべく、『三国志伝』に拠っていくつかの情節をその中に移植した。『兩朝史伝』の巻内書題次行には「東原貫中羅本編輯」「西蜀升菴楊慎批評」とし、『残唐五代史演義』が「貫中羅本編輯」「卓吾李贄批評」としているから、『三国志伝』の情節を盗んだのは極めて意図的であったことがわかっていよう。楊が関わっていたと考えられる講史小説にはこのほかに『列国志』があり、楊麗泉清白堂は楊湧泉清江堂が出した熊大木の歴史シリーズを再編輯して出版する企画を温めていたようであるが、清白堂の講史小説は現在一つも伝存しておらず、『残唐五代史演義』や『兩朝史伝』、そして『列国志』などはみな精巧な挿図の施された大部な蘇州刊本である。もし楊麗泉が自分で『残唐五代史演義』を上梓していたとすればそれはきっと建陽独特の上図下文の体裁であったに違いない。『残唐五代史演義』はそんなに大部ではないが、『兩朝史伝』や『列国志』は非常に分量の多い大作であり、伝存している楊麗泉清白堂刊の書物を見る限りでは、それを出すだけの資本が彼にあったのか疑問が残るところである。楊の関わった講史小説を出したのは奇しくも皆蘇州の書肆龔紹山であった。龔紹山は『列国志』と『兩朝史伝』を刊刻したほか、『兩朝史伝』の巻末に「繼此以後則有『残唐五代志伝』詳而載焉、読者不可不并為涉獵、以睹全書。」とあるので、龔紹山は『残唐五代史演義』をも刊行していたことであろう。龔紹山の『列国志』は大塚氏の研究によれば、同じ蘇州の書賈朱篁の刊本を翻刻したものであり<sup>(9)</sup>、かつその『列国志』は羅貫中編次を謳っていないことから、龔紹山は羅貫中シリーズを偽造する黒幕ではなく、単に入手したものを手当たり次第刊行していただけたようなものである。一体どのような事情で建陽の楊麗泉の講史小説が蘇州で刊行されるようになったのか、興味の湧くところであるが、今のところ真相は闇にまつまされたままである。

1 橋本堯「残唐五代史演義論—英雄中心主義—」(『中国文学報』20, 1965)114~115

頁参照。

- 2 趙景深「『残唐五代史演義』」(『中国小説叢考』 崑崙書社 1980 所収) 参照。
- 3 川島郁夫「白話文学における存孝説話—小説、戯曲に見える人物像について—」(『中国俗文学研究』 第 4 号 1986) 90 頁。
- 4 金文京「関羽の息子と孫悟空(上)(下)」(『文学』 54 卷 6・9 号 岩波書店 1986), 金文京等『花関索伝の研究』(汲古書院 1989), 大塚秀高「小説と物語—劍神説話を端緒として—」(『中国古典小説研究動態』 第 4 号 1990)・「小説と物語(続)—物語の構造と変貌—」(『中国古典小説研究動態』 第 5 号 1991), 小松謙「劉秀伝説考」(『未名』 9, 1991) 等が参考になった。
- 5 大塚秀高「講史章回小説の出版と改変—『列国志』をめぐって—」(『中国古典小説研究動態』 第 3 号 1989) 66 頁。
- 6 A は『古本小説集成』(上海古籍出版社) 第 117 冊に、B は第 131 冊に影印本が収められており、それを参照した。
- 7 鄭振鐸「中国小説提要」第 18 節「残唐五代史演義」(『鑑賞周刊』 第 14 期, 1925), 趙景深注 2 前掲論文。
- 8 柳存仁「羅貫中講史小説之真偽性質」(劉世徳編『中国古代小説研究』上海古籍出版社 1983 所収, 原載は『香港中文大学中国文化研究所學報』 8-1, 1976) 94 頁～。
- 9 注 5 大塚秀高論文 59, 77～78 頁参照。

第5章 趙匡胤物語の演变——『南宋志伝』、『飛龍全伝』よりみた——

第1節 『南宋志伝』と『五代史平話』

五代末から宋初にかけては次々と王朝が交代し、北宋が建国して後もしばらくは北漢、南唐、契丹などとの戦争が続いた疾風怒涛の時代であった。馬幼垣氏が指摘しているように、このような時代は「開国建朝主題」として講史小説の格好の材料となる<sup>(1)</sup>。『南宋志伝』はこの時代を題材にとった講史小説の嚆矢と呼ぶにふさわしい作品である。物語は五代後晋を興した石敬瑭の生い立ちから語り始められ、宋太祖趙匡胤が登極の後南唐を滅ぼすまでで終わっており、それ以降は続編に相当する『北宋志伝』が物語を引き継いでいく。『南宋志伝』については第6章で論ずることにするが、明代の『南宋志伝』は『北宋志伝』と合刻されているので、版本に関してはここで『南宋志伝』とあわせて説明する。『南宋志伝』10巻と『北宋志伝』10巻は普通『南北両宋志伝』と称され、以下のようなテキストが残っている。

①建陽余氏三台館刊本〔三台館本〕 不分回 13×23 上図下文

【内閣文庫】『古本小説集成』所収影印本、『明清善本小説叢刊』所収影印本。

②新刻全像按鑑演義南北宋伝題評 存巻4至7 12×22 上図下文

※ 孫楷第：「内容与通行本異。此書余未見，不知与三台館本，世德堂本是一本否。」

【北京図書館】

③金陵唐氏世德堂刊本（文台余氏双峰堂）〔世德堂本〕 新刊出像補訂參采史鑑 南北宋志伝通俗演義題評 50回+50回 12×24 挿図 万曆21年序刊 姑蘇陳氏尺蠖齋評釈

【北京図書館，内閣文庫】『古本小説叢刊』所収内閣文庫蔵本影印本、『明清

善本小説叢刊』所収内閣文庫蔵本影印本。

※ 北京図書館蔵本は、南宋巻5, 7, 8等は文台余氏双峰堂校梓とする。

④致和堂刊本 新鐫陳眉公批点按鑑參補出像 50回+50回 存南宋巻1, 2, 北宋巻1, 3至6 10×24 図8+8葉

【北京図書館】

※ 南宋志伝は菰蘆釣叟訂正, 青溪老人校閲と称する。

⑤金閨葉岷池刊本 新刊玉茗堂批点繡像南北宋伝 50回+50回 10×20 図16+16葉 万曆46年序刊

【宮内庁書陵部, 国会図書館(南宋のみ), 東京大学東洋文化研究所倉石文庫(南宋のみ)】『明清善本小説叢刊』(天一出版社)所収影印本。

※ 孫楷第氏は「此葉岷池本与世徳堂本巻数回数並同, 所載叙文字亦同, 唯署題異。今之坊間翻刻及本, 並從葉岷池本出。」とする。

孫楷第氏がこの諸版本の中で一番古態を留めているとしたのは①の三台館本である<sup>(2)</sup>。確かに中国古典小説の演變史からみれば, 字数の揃った回目を立てる③の万曆21年序刊世徳堂本よりも, 字数が不揃いな節目形式の三台館本の方が刊行時期は晚い筈である。しかし, 両者を一部対校してみたところ, 原本から文字が欠落していると思われる個所がそれぞれあり, 恐らく基づくテキスト(原刊本であったかもしれない)が別々にあったと想像される。それゆえ, 三台館本・世徳堂本を参照しながら論を進めていくことにしたい。

『南北両宋志伝』についてはその書名と作者についていろいろと議論が交わされていた。まず書名であるが, 北宋の話が主である『北宋志伝』はともかく, 南宋の話が全く出てこないのに『南宋志伝』とは不可思議な書名であり, 世徳堂本の評釈者でさえもこの書名に対し疑問を抱いている。孫楷第氏は『北宋志伝』が各巻を『甲統集巻之一』, 『乙統集巻之二』などのように十干に分け, また『北宋志伝』第1回の按語に「謹按: 是伝紀一十巻, 起於唐明宗天成元年石敬瑭出身, 至宋太祖平定諸国止。今統『後集』一十巻起宋太祖再下河東, 至仁宗止。

収集『楊家府』等伝、總成二十卷、取其揭始要終之義。並依原成本參入史鑑年月編定。四方君子覽者、幸垂藻鑑。」とあることから、『南宋志伝』は本来は『宋伝』、『北宋志伝』の方は『宋伝統集』という題名だったのではないかと考えた。馬力氏はそこから更に考察を進め、趙匡胤が南宋王に封じられたことがあり、もともと「南宋王趙匡胤出身伝」というような書名であったのが、その後翻刻を重ねていく過程で縮められ『南宋志伝』となったのではないかという仮説を提示した<sup>(3)</sup>。現時点では馬氏の解釈が最も妥当と思われる。

作者についても議論紛々として未だ定説をみない。世徳堂本には序文も含めてどこにも作者の手がかりがないが、三台館本では巻1内題次行に「雲間眉公 陳繼儒 編次」とある。これは仮託と考えられているが、ただ三台館本の序文には「昔大本先生、建邑之博洽之士也。編覽群書、涉獵諸史、乃綜核宋事、彙為一書、名曰『南北宋兩伝演義』。事取其真、辭取明、便士民觀覽、其用力亦勤矣。」とあることから孫氏は作者を熊大木ではないかと考えた。熊大木は『唐書志伝』を始め多くの講史小説に関わっている人物であるから『南北宋志伝』の作者だったとしても不思議はない。馬力氏は、現在の三台館本はその書名一事をとってみても原刊本とは考えられず、三台館本の序に熊大木の名前が出ていたからといって今伝存している『南北宋志伝』が熊大木の作であるとは限らない、と熊大木作者説に対して慎重な態度をとる。しかし、この『南北宋志伝』が果たして熊大木の手にかかるものかどうかは、熊大木の作品であることがはっきりしている『唐書志伝』、『大宋中興通俗演義』などと構造を比較してみたら当否を論ずるべきではないかと筆者は考える。そこで取りあえず『南北宋志伝』は熊大木の作ということにしておき、この作品がどのように構成されているかを検証していく。

『南宋志伝』が『五代史平話』と密接な関わりがあることはつとに指摘されているが、戴不凡氏は『南宋志伝』と『五代史平話』を比較し、その相違点を次の四点にまとめた<sup>(4)</sup>。



- ① 『南宋志伝』の方が『五代史平話』より長編だが、平話の原文はほとんどその中に抄録されている。
- ② 『南宋志伝』の文章が長くなっているところは、多くは戦闘場面や人物紹介の増補、ストーリーの引き延ばしなどによる。
- ③ 『南宋志伝』は例に挙げたように、百十四字の詔旨（および奏表）を増やしている。
- ④ 『南宋志伝』は詠史詩、特に周静軒詩を増補している。

また、イデマ氏も『南宋志伝』に『五代史平話』の『晋史平話』と『周史平話』が多くの材料を提供しているほか、趙匡胤の若い頃についての平話が参考にされていたのではないかと述べ、その根拠に15世紀の朝鮮の中国会話手冊『朴通事諺解』にある「買趙太祖飛龍記唐三藏西遊記去。買時買四書六經也好。既読孔聖之書、必達周公之理、要怎麼那一等平話。」という対話を挙げている<sup>(5)</sup>。そこで筆者も『南宋志伝』と各種平話との関わりを大まかに表にして整理を試みた。

表4 『南宋志伝』の構成

- ◎ = 『五代史平話』と殆ど同じ。      ○ = 『五代史平話』とかなり一致する。
- △ = 半分位一致している。      ▽ = ほんの僅か一致する。
- × = 『五代史平話』とは無関係。

回数				
1	◎	26	△	
2	○	27	△	
3	◎	28	△	〃
4	◎	29	△	〃
5	△	30	△	〃
6	△	31	○	〃
7	○	32	△	〃

8	△		33	×	〃	※ 楊家將平話
9	○		34	▽	〃	〃
10	○		35	△		〃
11	◎		36	△		
12	◎		37	△		
13	×	飛龍平話	38	△		
14	×	〃	39	○		
15	×	〃	40	△		
16	×	〃	41	△		
17	×	〃	42	△		
18	×	〃	43	△	〃	
19	×	〃	44	/	〃	
20	×	〃	45	/	?	
21	×	〃	46	/	?	
22	×	〃	47	/	?	
23	▽	〃	48	/	?	
24	▽	〃	49	/	?	
25	△		50	/	?	

どの程度共通した表現があるかについて、正確に字数を数えたわけではなく、目分量に頼る大ざっぱな分類であるが、それでもある程度全体の輪郭は見えてくる筈である。

飛龍平話というのは宋太祖趙匡胤を主人公とする古い物語を指すが、宋太祖が登場しても『五代史平話』にも同じような場面があるものは飛龍説話と見なしていない。『南宋志伝』の44回以降は、それに対応する『五代史平話』が失われているので確認できない。45回以降、宋太祖や鄭恩は登場することはするものの殆ど活躍しなくなるので、この部分は飛龍説話に拠っていないのかもしれないと考え、“?”を付しておいた。また45回以降は史書の引用と考えられる個所が多く、『五代史平話』の今は佚した部分の記述を用いたのか、あるいは熊大木が自分で史書を引用して書いた可能性が考えられる。以上、『南宋志伝』

は1～12, 23～32, 34～43回までは『五代史平話』をよりどころとしており、13～24, 28～34, 43～44回までは趙匡胤を主人公とする飛龍平話を用い、33～35回には楊家将平話も顔をのぞかせている。そしてそれらの物語の隙間を埋めるために史書の叙述が用いられ、特に45～50回までは史書に多く依拠したかたい文章になっている。次節ではそれがどのような史書であったのか考察してみる。

## 第2節 『南宋志伝』の基づいた歴史書

『南宋志伝』が基づいた史書について追究するため、最初に小説中の歴史書と関わりのある主な評注をリストアップしてみる。

表5 『南宋志伝』の主な評注一覧

回	評注
① 19	按伝云郭威兵拔河中府，李守貞與妻子赴火自焚。 ※ この注釈は『五代史平話』周史平話卷上の「郭威將兵攻拔了河中府外城，李守貞與妻子赴火自焚。」のことを指していつているようである。
② 25	按伝説漢主走入百姓家為亂軍所殺。 ※ これも『五代史平話』周史平話卷上の「漢主回轡，北至趙村，追兵已及，疾忙下馬，走入百姓家，忽為亂軍所殺。」に拠る。
③ 26	按李太后極賢，初知遠称帝，晋王帑藏空虚，無財帛可以賞軍。…… ※ この挿話は『五代史平話』から引き写した文章の間を割って増補されたものである。司礼監刊本『節要』には見えないが、『通鑑』巻286・『綱目』巻58にはあり、この個所については殆ど異同がないため、いずれに拠っているのか確認できない。『旧五代史』、『新五代史』の該当個所の文辞はかなり異なるのでこの二書を参考にしたのではないだろう。『通鑑紀事本末』にもこの挿話はない。
④ 30	周史断曰，周世宗纔登大位之後，便遭北漢主劉崇拳兵伐喪。…… ※ これはいかにも史評だが、今のところ典拠未詳。『綱目』・『通鑑詳節』・司礼監刊本『節要』・『李氏綱鑑』には見えない。司馬光や歐陽修の論でもないようであ

る。

⑤ 30 翌日兵進懷州小説北澤州。

※ 世徳堂本では眉欄に「懷州小説北■州」とある。『五代史平話』も『飛龍全伝』も「懷州」に作る。『平話』では「世宗自懷州倍道疾駆、不旬月間已到澤州」とあり、主戦場は「澤州」という設定になっている。この「小説」は『平話』を指しているであろう。

⑥ 31 小將是史建唐從子史彥昇通鑑作王彥昇。

※ 『五代史平話』周史平話巻下では「史彥超」に作る。

⑦ 39 然有劉仁瞻據守秦州未下秦州通鑑作壽州。

※ この前後は『五代史平話』の引用個所にあたり、現行の『五代史平話』の排印本では「壽州」（『通鑑』や『綱目』でもそうになっている）になっている。熊大木の見た『五代史平話』にはそのような誤字があったのであろうか。なお、この注は41回でもしつこく「按秦州通鑑並在壽州、小説來本如此。還作壽州為是。」と繰り返されている。

⑧ 46 質等未及對、帳前羅彥威通鑑作彥瓌拔劍厲聲曰。

※ 注で「通鑑作彥瓌」とありこれは諸書の表記と一致するが、このあたりはとうに『通鑑』や『綱目』の筆の及ぶところではない。

これらの評注をつけたのは誰なのであろうか。①②⑤あたりの注は『五代史平話』や「小説」を参考に行っているようなので、原作者の書いた原注とみてほぼ間違いあるまい。問題となるのは『通鑑』か『綱目』に拠っているらしい③、そして「通鑑作……」とする⑥⑦⑧である。例えば⑧であるが、羅彥威の名は飛龍平話の含まれる『南宋志伝』第13回に最初に見え、それ以降も羅彥威のまままで通してきている。原作者は一応注釈でさりげなくコメントしておいたとも考えられるが、原作者であれば『通鑑』に拠って校訂すれば注などつける必要がないとも考えられ、今のところはっきりした結論は出せない。③に見える『通鑑』・『綱目』との関わりについては後述することにし、次に地の文と歴史書との結びつきについてみていく。

『通鑑』や『綱目』は五代周で終わり、この⑧の場面を含む宋太祖の即位までの経緯や、それ以降の話は描かれていない。では45回以降の宋朝の話は一体何

に基づいたのであろうか。『五代史平話』の目次は「……一軍士推戴趙太祖／趙太祖受恭帝禪／趙太祖改国号为宋」となっており、目次と本文の内容が一致していたならば、物語は趙匡胤の“登極”で終わっている筈であるから、『南宋志伝』の底本としては使えない。となると宋元以降の時代をカバーする歴史書について考えてみなければならない。宋元の歴史書で『通鑑』に近い形の史書というと、宋李燾の『統資治通鑑長編』、元陳桎の『通鑑統編』、明成化年間に編纂された商輅等編『統綱目』、明薛応旂『宋元通鑑』、明王宗沐『宋元通鑑』、明劉刻『節要統編』などが宋元史の単行専著であり、紀事本末体の史書では宋袁枢『通鑑紀事本末』、明陳邦瞻『宋史紀事本末』（この書は明万暦23年頃の成立とされ、熊大木の参照とするところにはならなかったであろう）があり、その他にも宋元期の記述は『通鑑』や『綱目』を参考にしている『通鑑纂要』などのダイジェスト本が存在するから相当な数になる。これらの中でどれが一体熊大木の用いた底本に近いのか、具体例を挙げながらみていきたい。

〔例5〕

<p>有將士捉得 范質王溥等 至。質挺身責匡胤曰，公乃世宗之親臣。今乘人喪亂而遂欲自立。異日何以見先帝於地下。今對吾輩，豈不自愧耶。匡胤 流涕曰，吾受世宗厚恩，為六軍所逼，一旦至此，慚負天地，將若之何。質等未及對，帳前羅彥威拔劍厲聲曰，我輩無主，今日必立檢点為天子，再有異議者斬首号令。王溥面如土色。降階先拜。質不得已亦拜。（三台館本 46 回）</p>	
<p>將士擁 質 等 俱至。</p>	<p>太祖嗚咽流涕曰，吾受世宗厚恩，為六軍所逼，一旦至此，慚負天地，將若之何。質等未及對，散指揮都虞侯太原羅彥瓌挺劍而前曰，我輩無主，今日必得 天子。太祖叱之不退，質等不知所為。溥 降階先拜。質不得已從之。（『統資治通鑑長編』卷1）</p>
<p>將士擁 范質 等 至。</p>	<p>匡胤見之流涕曰，吾受</p>

<p>世宗厚恩，為六軍所迫，一旦至此，慚負天地，將若之何。質等未及对，列校  <u>羅彥瓌</u>挺劍厲聲曰，我輩無主，今日必得天子。質等相          顧，不知所為。溥降階先拜。質不得已亦拜。（『統綱目』卷 1）</p>
<p>將士擁幸相<u>范質</u>等至。質以義讓<u>匡胤</u>曰，先帝養太尉如子，今骨肉未寒而  <u>太尉</u>若此。奈先帝何。匡胤流涕曰，吾受          先帝厚恩，違負天地，一旦至此，君其謂我何。質等未及对，列校  <u>羅彥瓌</u>按劍厲聲曰，我輩無主，今日必得天子，          質知勢不可退曰，事已無太倉卒。（薛應旂『宋          元通鑑』卷 1）</p>
<p>將士擁 范質王溥等 至。質以義讓<u>匡胤</u>，          匡胤 流涕曰，吾受          世宗厚恩，為六軍所迫，一旦至此，慚負天地，將若之何。質等未及对，列校  <u>羅彥瓌</u>挺劍厲聲曰，我輩無主，今日必得天子。質等相          顧，不知所為。溥降階先拜。質不得已亦拜。（『節要統編』卷 1）</p>
<p>將士擁 范質王溥等 至。××××××，          匡胤 流涕曰，吾受          世宗厚恩，為六軍所迫，一旦至此，慚負天地，將若之何。質等未及对，列校  <u>羅彥瓌</u>挺劍厲聲曰，我輩無主，今日必得天子。質等相          顧，不知所為。溥降階先拜。質不得已亦拜。（『李氏綱鑑』卷 28）</p>

三台館本は「羅彦威」の文字の後に「通鑑作彦瓌」小字注がある。『宋史通鑑』は『統資治通鑑長編』と大体同じであるが、范質が太祖をなじる句がない。王宗沐『宋元通鑑』、『黃氏綱目』統編卷 1 は『統綱目』と同文なので略す。『通鑑纂要』は『統綱目』の文章より更に簡略化されている。『通鑑統編』、『湯氏綱鑑』、『鍾氏綱鑑』卷 49 は『節要統編』と全く同文。『王氏大全』卷 28，『王氏綱鑑』卷 1 は『李氏綱鑑』と同文である。

『南宋志伝』の「質挺身責匡胤曰」という個所（傍線部）が、『統資治通鑑長編』・『統綱目』・王宗沐『宋元通鑑』・『李氏綱鑑』・『王氏大全』・『王氏綱鑑』・『顧氏綱鑑』・『陳氏綱鑑』にはいずれも欠けている。一方、『節要統編』・『通鑑統

編』・『湯氏綱鑑』・『鍾氏綱鑑』・薛応旂『宋元通鑑』には「質以義讓匡胤」という文字が見える。この中で、唯一薛応旂『宋元通鑑』には三台館本と同じく、范質が趙匡胤をなじる言葉があるが(波線部)、詰問の辞としては三台館本の方がはるかにきつく、両者の間に共通の語彙が全くないので小説は史書に基づいてこの范質の言葉を書いたわけではないようである。

さて、この例を見る限りでは、『南宋志伝』は『通鑑統編』か『節要統編』を参照していたようであるが、もう一つ、本文が歴史書に拠っている例を検討してみる。

〔例6〕

<p>建隆二年夏六月杜太后得疾已重。太祖侍×寝左右不離， 謂太祖曰，汝 知所以得天下乎。</p>	<p>后召趙普入受遺命。</p>
<p>然。正由周世宗使幼兒主天下</p>	<p>太祖曰，誠出祖考及太后之積慶也。后曰，不然。故汝得至此。</p>
<p>汝万歳後，当伝位與光義，光義伝光美，光美伝徳昭。</p>	
<p>国有長君，社稷之福也。太祖 泣曰，敢不如 教。后又顧謂趙普曰，爾同記吾言不可忘也。普受命，就于榻前為約誓，書畢，於紙尾写曰，臣趙普記。太祖命藏之 金匱， 謹密宮人掌之，至是后 殂。按光義光美，太祖之弟，徳昭太祖子也。(『南宋志伝』46回)</p>	
<p>六月甲午皇太后崩。……及寢疾，上 侍藥餌不離左右，疾革， 召 普入受遺命。且問上 曰，汝自知所以得天下乎。上 嗚咽不能對。后曰吾自老死，哭無益也。吾方語汝以大事，而但哭耶。問之如初。上 曰，此皆祖考及太后×餘慶也。后曰，不然。政由柴氏×使幼兒主天下 。群心不附，故耳。若周 有長君，汝安得至此。汝與光義皆我所生。 汝 後，当伝位汝 弟。四海至広， 能立長君，社稷之福也。上 頓首泣曰，敢不如太后教。因謂 普曰，汝同記吾言不可違也。普 即就 榻前為 誓 書 於紙尾署曰，臣 普記。上 藏其書金匱，命謹密宮人藏之，××××××××××××××××××××××××。(『統資治通鑑長編』卷1)</p>	





国有長君，社稷之福也。帝泣曰，敢不如教。后顧謂普曰，爾同記吾言不可違也。普即榻前為約誓書于紙尾署曰，臣普記。藏之金匱，命謹密宮人掌之，遂崩。××××××××××××××××。 (薛應旂『宋元通鑑』卷1)

六月宋太后杜氏殂。后疾，宋主侍藥餌不離左右，疾革，召趙普入受遺命。且問宋主曰，汝知所以得天下乎。

宋主曰，皆祖考及太后之餘慶也。后曰，不然。正由柴氏使幼兒主天下爾。若周有長君，汝安得至此。汝百歲後，當位光義，光義傳光美，光美傳德昭。夫四海至広，能立長君，社稷之福也。宋主泣曰，敢不如教。后顧謂普曰，爾同記吾言不可違也。普即榻前為誓書於紙尾署曰，臣普記。藏之金匱，命謹密宮人掌之，遂殂。××××××××××××××××。 (『統綱目』卷1)

『宋史通鑑』卷1は『統資治通鑑長編』の文章と殆ど同じ。『李氏綱鑑』卷28，『王氏綱鑑』卷1，『湯氏綱鑑』卷46，『鍾氏綱鑑』卷49，『王氏大全』卷28は「太祖」を「帝」または「宋主」に作るほかは，『節要統編』と殆ど同文。『統綱目』については，成化刊本，慎獨齋嘉靖刊本，万曆刊本みな異同なし。『通鑑纂要』卷67は，「宋主曰，皆祖考及太后之餘慶也。后曰，不然」と「遂殂」の文字が省略されているほかは『統綱目』に同じ。『黃氏綱目』卷1も『統綱目』と同文。

表6

南宋志伝	侍寝左右不離	積慶	故汝得至此	万歳	×	光義光美
続通鑑長編	侍葉餌不離左右	余慶	×	×	四海至広	×
通鑑続編	×	○	×	百歳	四海至広	×
通鑑節要続編	×	○	○	○	×	○
王宗沐宋元通鑑	侍葉餌不離左右	余慶	×	百歳	四海至広	×
薛応旂宋元通鑑	侍葉餌不離左右	余慶	×	百歳	×	×
続通鑑綱目	侍葉餌不離左右	余慶	×	百歳	四海至広	×

「金匱の盟」として有名なエピソードである。ここでは煩瑣を厭わず代表的な史書を挙げてみた。『続資治通鑑長編』は少し詳しすぎ、『南宋志伝』に見える「積慶」が「余慶」となっており、「万歳」の文字も見えない。『続綱目』・薛応旂『宋元通鑑』・『通鑑纂要』など『続綱目』系統の書も「積慶」が「余慶」に、「万歳」が「百歳」となっている。『通鑑続編』と『節要続編』はともに「積慶」、「万歳」となっているが、そのほかは『節要続編』の文字の方が『南宋志伝』に近い。『節要続編』を基にして編まれたという『李氏綱鑑』や『鍾氏綱鑑』などは万暦以降の刊本であり、嘉靖の人、熊大木が参照したテキストではあり得ない。一点気になるのが『南宋志伝』にある「太祖侍寝左右不離」という語が『続資治通鑑長編』や『続綱目』にはあるのに『通鑑続編』や『節要続編』に見えないことである。『節要続編』は『通鑑続編』に基づいてはいるが別の歴史書に拠って補訂している個所が所々あり、『節要続編』の原本にはあったこの字句が筆者の参照した高麗刻本では欠落してしまったということも考えられるが、この字句だけは『続綱目』に拠っているという可能性も捨てきれない。もう一例を挙げる。

[例 7]

<p>……謂趙普 曰，天下自唐季以來數十年間帝王凡易八姓十二君，謂<u>梁太祖</u> ，  <u>唐莊宗</u> ，<u>唐明宗</u> ，<u>李潞王</u>， <u>晉高祖</u> ，<u>漢高祖</u> ，<u>周太祖</u> ，  <u>柴世宗</u> <u>梁均王</u>，<u>漢隱帝</u>，<u>晉出帝</u>，<u>周恭帝</u> 共八姓十二君也。僭竊  相踵，鬪戰不息，生民塗地，其故何也。吾欲息天下之兵，建國家長久之計，其道何  如。普對曰，陛下之言及此，<u>天地人神之福也</u>。此無別故。皆由方鎮太重，君弱臣強  而已。今欲 治之， 宜稍奪其權，制其錢穀，收其精兵，則天下自安矣。  (『南宋志伝』46回)</p>
<p>一日召趙普問曰，天下自唐季以來數十年間帝王凡易八姓 ， ，</p> <p> 戰鬪不息，生民塗地，其故何也。吾欲息天下之兵，為國家長久 計，其道何  如。普 曰，陛下之言及此。天地人神之福也。此非他故。 方鎮太重，君弱臣強  而已。今所以治之，亦無他奇巧，惟稍奪其權，制其錢穀，收其精兵，則天下自安矣。  (『統資治通鑑長編』卷1)</p>
<p>……謂趙普 曰，天下自唐季以來數十年間帝王凡易八姓</p> <p> 鬪戰不息，生民塗地，其故何也。吾欲息天下之兵，建國家久長之計，其道何  如。普對曰， 。此無他 。 方鎮太重，君弱臣強  而已。今欲 治之， 宜稍奪其權，制其錢穀，收其精兵，則天下自安矣。  (『通鑑統編』卷1)</p>
<p>……謂趙普 曰，天下自唐季以來數十年間帝王凡易八姓十二君</p> <p> 僭竊  相踵，鬪戰不息，生民塗地，其故何也。吾欲息天下之兵，建國家久長之計，其道何  如。普對曰，陛下之言及此，天地神人之福也。此無他 。 方鎮太重，君弱臣強  而已。今欲 治之， 宜稍奪其權，制其錢穀，收其精兵，則天下自安矣。  (『節要統編』卷1)</p>
<p>……謂趙普 曰，天下自唐季以來數十年間帝王凡易八姓 <u>梁太祖朱氏</u>，</p>

唐莊宗朱邪氏，唐明宗李氏，潞王王氏，晉高祖石氏，漢高祖劉氏，周太祖郭氏，世宗柴氏，凡八姓，梁均王，漢隱帝，晉出帝，周恭帝同上共 一十二君也。僭竊相踵，鬪戰不息，生民塗地，。吾欲息天下之兵，建國家久長之計，其道何如。普對曰，陛下之言及此，天地人神之福也。此無他。 方鎮太重，君弱臣強而已。今欲 治之， 宜稍奪其權，制其錢穀，收其精兵，則天下自安矣。（『鍾氏綱鑑』卷49）

因喟然歎息曰， 自唐季以來數十年間 八姓十二君，僭竊相踵，朱全忠以宣武軍節度使起，李克用以河東節度使起，石敬瑭自保義軍節度使篡唐，劉知遠自忠武節度使篡晉，郭威自天雄節度使篡漢， 兵革不息，生民塗炭，。吾欲息天下之兵，建 久長 計，其道何如。普對曰，陛下之及此言，天地神人之福也。。 節鎮太重，。 ， 唯稍奪其權，， ， 則天下自安矣。（薛應旂『宋元通鑑』卷1）

……謂×普曰，天下自唐季以來數十年間帝王凡易八姓， 鬪戰不息，生民塗地，其故何也。吾欲息天下之兵，為國家長久 計，其道何如。普對曰，。此無他。 方鎮太重，君弱臣強而已。今欲 治之， 宜稍奪其權，制其錢穀，收其精兵，則天下自安矣。（『統綱目』卷1）

表 7

南宋志伝	梁太祖唐莊宗～	僭竊相踵	天地人神之福
統通鑑長編	×	×	○
通鑑統編	×	×	×
通鑑節要統編	×	○	天地神人之福
綱鑑正史大全	○	○	○
薛應旂宋元通鑑	×	○	天地神人之福
統通鑑綱目	×	×	×

『宋史通鑑』の記述はやはり『統資治通鑑長編』とよく似ている。『王氏大全』巻28は「太重」を「大重」に作る以外は『鍾氏綱鑑』と同文。『湯氏綱鑑』巻47、『李氏綱鑑』巻28は『鍾氏綱鑑』と同じく『節要統編』に基づいているようなので殆ど同じであるが、「十二君」「其故何也」など若干の出入がある。『王氏綱鑑』巻1は『歴史大方通鑑』と同文。『統綱目』の成化刊本、慎獨齋嘉靖刊本は同じ。万曆刊本は「何如」を「如何」に作る。『黄氏綱目』では「天下之兵」が「天下兵」に、「自安」が「自定」になっている点が『統綱目』と異なる。また、『通鑑纂要』巻67では「其故何也」と「矣」の文字が欠けている。王宗沐『宋元通鑑』にはこの記事はない。

『通鑑統編』にはない文字が『節要統編』や『鍾氏綱鑑』に何箇所もある。例えば、「僭窃相踵」、「天地人神之福」などであり、この言葉は『統綱目』にはない。薛応旂『宋元通鑑』には何故か『統綱目』にないこの文字があるが、『宋元通鑑』の成立は『節要統編』よりも晩いので、『節要統編』の編者劉剡は他の本を参照し、『通鑑統編』を補ったのではないかと考えられる。この場合、『統資治通鑑長編』にも「僭窃相踵」の文字がないから恐らく『統資治通鑑長編』以外の書で補訂したのであろう。『節要統編』より更に小説に近いのは、各種節要系『綱鑑』であり、ここでは『鍾氏綱鑑』だけを例に挙げたが、『綱鑑』には他の書にはない、「八姓十二君」の説明があり、小説と一致する。いずれにせよ、ここでも『統綱目』系統よりは『節要統編』系統の方が『南宋志伝』に近いのははっきりしている。この場面の後、『南宋志伝』や『節要統編』では太祖が石守信らを宴会に招き、暗に兵権を返すよう促す場面があるが、この出来事は『統綱目』では建隆2年7月のこととして、ここよりも前に別々に記されている。

以上で、熊大木が『南宋志伝』に『節要統編』系統からの説話を増入していたことが確かめられた。このような通俗歴史書の形成史については第1章で既に論じているが、『節要統編』は『節要』の宋元以降の不備を補うために建陽の書賈劉剡によって編集された書物で、初版は明宣徳7年(1432)に上梓されて

いる。その後、正徳年間（1506～1521）に司礼監刊本、嘉靖38年（1559）頃に『宋元通鑑全編』として増補翻刻されている。司礼監刊本や『宋元通鑑全編』は未調査だが、嘉靖年間に建陽の熊大木が『南宋志伝』を編纂するにあたって利用するには格好の書物であったといえよう。

最後に、『南宋志伝』の詠史詩を確認しておく。三首以下のものは原則として割愛し取らなかった。

表8 『南宋志伝』の主な詠史詩

巻	後人	無名氏	宋賢	周静軒	古風	杜甫
1	2	4		1	1	1
2	3	4		1		
3	3	12	1	2		
4	1	6		2		
5		5	1	4		
6	1	1	4	2		
7	4	1	1	2		
8	2	7		3		
9	5	4		6		
10	4	2		1		
計	25	46	7	24	1	1

『南宋志伝』にはかなりの詠史詩があるが、その中で周静軒詩は24首を数える。清江堂から出た熊大木編集の『唐書志伝』にも周静軒詩は入れられており、この事実も『南宋志伝』熊大木作者説を裏付ける傍証の一つになるであろう。

### 第3節 『南宋志伝』と『飛龍全伝』

この節では、『南宋志伝』中の飛龍平話に焦点を絞り、その飛龍平話と清代に成立した『飛龍全伝』との関わりを論じていきたい。

この『南宋志伝』の実質的な主人公はイデマ氏もいうように宋太祖趙匡胤で

あろう<sup>(6)</sup>。彼も俗文学の世界では唐太宗などとともに、いやそれ以上の英雄好漢ぶりを発揮していた筈であり、元羅燁『醉翁談録』に宋人の話本として『飛龍記』の名が見え、宋代に既に彼の物語が語られていたようである。イデマ氏の指摘した『趙太祖飛龍記』は元の時代のものだが、恐らくそれは宋代の物語が更に発展したものであったろう。雑劇でも「西華山陳搏高臥」雑劇（馬致遠作、『元曲選』）、「宋太祖龍虎風雲会」雑劇（羅本作、脈望館明抄本）、「趙匡胤打董達」雑劇（無名氏、脈望館明抄本）、「趙太祖夜斬石守信」雑劇（佚）などの作品が作られていた。明代では『警世通言』巻21に「趙太祖千里京娘」なる話が収められているが、この話も元来は宋元戯文に「京娘怨燕子伝書」（佚）という演目があり、あるいはその影響を受けて成立したものかもしれない。また『西湖遊覧志餘』巻20で、瞿宗吉（『剪灯新話』の著者）が汴梁（開封）に立ち寄った時の詩に、「……盲の田舎女は悲哀もなく、琵琶をかきならして趙家（宋の王室）のことを語る」と詠んでいることから、その風俗は杭州と変りがないようだと言及しており、趙匡胤の物語を唱う講唱文学も存在していたことがわかる。『南宋志伝』中の飛龍平話は恐らく宋元の物語である『飛龍記』がその種本であったとみて間違いあるまい。元代の平話が明代においてそのまま講史小説の中に取り込まれることは決して珍しい現象ではないが、飛龍平話は今まで全く伝わっていなかったものであり、宋元の趙匡胤物語を知るための貴重な手がかりである。

では、この『南宋志伝』中の飛龍平話はどのような特色があるのであろうか。物語は第13回、司空趙弘殷の子、趙匡胤が旅に出るところから始まる。この趙匡胤、とんでもない乱暴者で天子の劇場を騒がすは、御酒を飲んで暴れるは、幾たびも法に触れて異郷の地を放浪することになる。しかし、彼は基本的には“公子”であり、窮地に陥ると八爪の金龍が頭上に現れ、危ういところを誰かに助けられる。それゆえ、これも貴種流離譚の一変型なのであろう。この物語を読んでいると、至るところに他の通俗小説との共通点が目につく筈である。例

えば、趙匡胤がやたらに女性を殺す様子を読むと『水滸伝』の武松像と重ね合わせてしまう。人を殺した後で壁に詩を残したり、至るところで義兄弟の契りを結んでいくのもいかにも『水滸伝』的である。また、義兄弟の中でも趙匡胤と柴榮、鄭恩の関係は明らかに『三国演義』の劉関張三兄弟の関係と同じであり、飛龍平話では大人しい長兄の柴榮が劉備、乱暴者の鄭恩が張飛、鄭恩に負けず劣らず乱暴者であるが趙匡胤が関羽ということになるだろう。趙匡胤の行くところ龍が現れることは既に述べたが、第20回の説話では、趙は赤帝子ということになっており、恐らく前世は関羽と同じく赤鬚龍だったであろう。そういえば趙も関羽のように赤ら顔であり、関羽の二代目といったところか。その他にも第22回で史弘肇が蘇逢吉を簡で打つのは『北宋志伝』あるいは『楊家将演義』の八王が王欽を簡で打つ話とそっくりであるし、第30回の弓比べの話は『残唐五代史演義』・『三国演義』とこれまたよく似た筋であり、その後の石を持ち上げる力比べは『薛仁貴征遼事略』の尉遲敬徳を連想させる。趙匡胤の苦難の旅は、義兄弟の柴榮が黄龍の生まれ変わりである郭威の養子になって趙を抜擢してくれたことで終わり(29回)、社会秩序の枠からはみ出たアウトロー生活に終止符を打つことで社会的仮死状態から蘇生する。復活を遂げた後の趙匡胤はトントン拍子に出世し、皇帝への道を一気に上り詰めていくが、このあたりの趙はそれ以前の趙に比べると少なからず精彩を欠いている。ここで指摘したように飛龍平話のここかしこに他の通俗小説の影が見えるのは、決してこれらを意図的に引用したからではなく(嘉靖中期では『三国演義』を除けば他の通俗小説はまだ殆ど出版されていなかった)、それぞれの小説の母胎となった語り物と飛龍平話が瓦子などの演芸場で競合しているうちに、知らず知らず影響を及ぼし合っていたからであろう。それゆえ明代の講史小説に限って言えば、どの話柄がどの小説の専売特許であるかを論ずるのは不毛の作業かもしれない。趙匡胤物語の単行本で現在残っている作品のうち、最も刊行時期が早いとされるのは清刊『飛龍全伝』60回であり、『孫目』及び『大塚目録』に拠れば、乾隆



33年自序刊本が一番古いとのことであるが、今回は東京大学文学部所蔵嘉慶2年序刊本と人民文学出版社排印本を用いて考察する。

『飛龍全伝』の序に拠れば、乾隆14年呉璿が挙業にいそんでいた頃、友人が『飛龍伝』という書を持ってきてくれたが、あまりに荒唐無稽なので放り出しておいた。それから19年を経て、呉璿は平話原本『飛龍伝』を基礎に、「其の繁文を刪し、其の俚句を汰し、布するに雅馴の格を以ってし、間するに清雋の辞を以して」改編したという。彼の改編本『飛龍全伝』が流行することによってこの平話原本はすぐに散失してしまったようだが、孫楷第氏が『聴雨軒筆記』から乾隆年間にも平話『飛龍伝』があったことを目録の中でわざわざ指摘しているのは、『聴雨軒筆記』に出てくる乾隆当時の飛龍平話が呉璿の友人の持ち込んだ原本と同じ内容であった可能性を考えていたからであろう<sup>(7)</sup>。

だが、呉璿が参照したのは乾隆当時の飛龍平話だけではない。これは今まで指摘されていなかったことであるが、『飛龍全伝』中には明らかに『南宋志伝』に由来する部分があるのである。筆者の調べたところでは、『飛龍全伝』60回のうち、第46回～60回までは『南宋志伝』29～45回が利用されている。ただし、52回後半から53回前半にかけての陶家の話、56回の王壬武の話は『南宋志伝』には見えない。57回にも若干『南宋志伝』にない情節がある。『南宋志伝』の29～45回は殆ど『五代史平話』を下敷きにしていた部分であり、『五代史平話』は『綱目』系のテキストに拠って作られているので、口語的表現の多い清代の『飛龍伝』平話との間に文体の不統一が生じている。『飛龍全伝』には蘇北方言の影響が出ていることが中国の学者から指摘されており<sup>(8)</sup>、『飛龍全伝』前半では小気味よい白話が多いのが印象的で、例えば、

美英聽言，仔細一看：但見鄭恩攤開身体，兩腿長毛，周身如黑漆一般，毛叢里吊着那黑昂昂的這個厥物，甚是雄偉。美英只叫一声：“羞殺吾也！”滿面通紅，低頭不顧，拔軔馬望後走了。一時霧散雲収，天清日朗。鄭恩哈哈大笑，提了棗樹跑回來，道：“二哥，棗子破妖術的方法如何？”匡胤道：

“好，好！行得不差。”（第11回）

普通，このような妖術が使われた場合，それを破るために鶏犬の血を撒いたりすることが通俗小説では常套なのだが，ここで鄭恩が用いた方法はあまりにも突飛であり，とても読書人が作り出した話とは思えない。そして，この部分は孫氏の想像するように，乾隆当時の『飛龍記』が元になっているのだろう。それに対し，46回以降は今まで殆ど出てこなかった詠史詩（周静軒詩など）や詔が出てくるなど文章も文言に近くなり，はっきり異質な文体であることがわかる。『飛龍全伝』が『南宋志伝』に拠っているということを示す例を一つ挙げておこう。

[例8]

<p>世宗得表大怒，與衆臣商議，要御駕親征。</p> <p>崇結連契丹，攻打潞州，</p> <p>人心未定，豈可親征。只命大将往救征討足矣。世宗道，不然。劉崇欺朕年少新立，乘輿動兵，攻打汴州，朕安得不親往乎。太師馮道出班奏道，千金之子，坐不垂堂。陛下以万乘之尊，親臨不測之地，臣窃以為不可也。世宗道，唐太宗得天下，凡有征伐，未嘗不親臨。太宗尚如此，況于朕乎。馮道奏道，不知陛下能為太宗否。世宗道，劉崇以十二州之地，兵力單弱，其所倚仗者，不過借契丹以為救援。以朕士馬之衆，兵甲之強，破劉崇如反掌耳。馮道道，未審陛下能否。世宗以馮道乃先朝元老，不與深較，但以優礼待之。（『飛龍全伝』第47回）</p>	<p>群臣奏道，陛下初登宝位，</p> <p>劉崇幸我大喪，欺負朕年少新立，此賊必自来，朕不得不往。馮道固争之曰，</p>
<p>世宗得表大怒，與群臣商議，欲自親征拒北漢兵。</p> <p>崇向來在平陽戰敗，逃遁以來，勢盛氣沮，必不敢自来。況陛下即位方新，山陵大事未畢，人心易搖，不宜輕動，只須命將禦之足矣。世宗曰，</p> <p>千金之子，坐不離堂。況万乘之君乎。今鎮臣効職，陛下不必親行也。世宗曰，昔唐太宗得天下，凡有征伐，未嘗不自親征。太宗英武尚如此，今朕怎敢偷安不以身先士卒乎。道曰，未審陛下能為唐太宗否。世宗曰，劉崇以十二州之地，軍力單弱，不過借契丹勢援而來。以吾国</p>	<p>群臣皆曰，劉崇以十二州之地，兵力單弱，</p> <p>兵甲之強，敗劉崇如泰山压卵</p>

耳，何足道哉。道曰，未審陛下能做山否。世宗以馮道前朝元老，優禮答之。(『南宋志伝』第30節)

三月初二日，世宗得表大怒，欲自將拒北漢兵。在朝群臣皆曰，劉崇向來在平陽戰敗，逃遁以來，勢蹙氣沮，必不敢自來。況陛下即位方新，山陵大事未畢，人心易搖，不宜輕動，宜命將禦之足矣。世宗曰，劉崇幸我大喪，欺負朕年少新立，此賊必自來，朕不可不往。馮道固爭之，世宗曰，昔唐太宗得天下，凡有征伐，未嘗不自親征。太宗英武尚如見，朕怎敢偷安不以身先士卒乎。道曰，未審陛下能為唐太宗否。世宗曰，劉崇以十二州之地，事力單弱，不過借契丹勢援以陵我。以吾國兵力之強，破劉崇如山丘卵耳，又何難哉。道曰，未審陛下能做山否。世宗以馮道前朝元老，優禮答之。(『五代史平話』周史平話卷上)

世宗欲自將禦漢兵。××群臣皆曰，劉崇××自平陽××，遁走以來，勢蹙氣沮，必不敢自來。×陛下新即位×，山陵有日××，人心易搖，不宜輕動，宜命將禦之××。世宗曰，×崇幸我大喪，輕×朕年少新立，××××××，此×必自來，朕不可不往。馮道固爭之。世宗曰，昔唐太宗定天下，未嘗不自行。朕何敢偷安。道曰，未審陛下能為唐太宗否。世宗曰，以吾國兵力之強，破劉崇如山丘卵耳。道曰，未審陛下能如山否。世宗不悅。(『綱目』卷59)

世宗聞北漢主入寇，欲自將兵禦之。××群臣皆曰，劉崇××自平陽××，遁走以來，勢蹙氣沮，必不敢自來。×陛下新即位×，山陵有日××，人心易搖，不宜輕動，宜命將禦之××。世宗曰，×崇幸我大喪，輕×朕年少新立，有吞天下之心，此×必自來，朕不可不往。馮道固爭之。帝曰，昔唐太宗定天下，未嘗不自行。朕何敢偷安。道曰，未審陛下能為唐太宗否。帝×曰，以吾國兵力之強，破劉崇如山丘卵耳。道曰，未審陛下能為山否。帝×不悅。(『通鑑』卷291太祖顯德元年)

『飛龍全伝』は所々『南宋志伝』の文字を変えている。例えば「敗劉崇如泰山  
压卵耳」を「破劉崇如反掌耳」にして、その結果もとの「未審陛下能做山否」  
の「做山」を取り去っている。しかし対校表からわかるように、基本的には『南  
宋志伝』に拠っている。「千金之子」以下の馮道の奏は、『五代史平話』や『通鑑』  
などに見えないが、『南宋志伝』にだけあるものである。また、「世宗以馮道」以  
下の文字は『通鑑』などの史書にはないが、『五代史平話』にはその文字が見  
え、『南宋志伝』に取り込まれたこの文字を『飛龍全伝』は踏襲していたこと  
になる。この例で、宋代の『綱目』の文章が『五代史平話』に利用され、その『五  
代史平話』の文章が明代中期に『南宋志伝』に取り込まれ、清代になって今度  
は『南宋志伝』から『飛龍全伝』へとその文字が受け継がれていったことが明  
らかになった。もっとも呉璿が利用した『南宋志伝』は三台館本や世徳堂本で  
はないらしい。『飛龍全伝』には僅かに三個所の史評の引用が見られる。

- ① 33 回史官評……郭威が即位し後漢が滅亡した際の評。三台館本や世徳  
堂本の『南宋志伝』にはない。『残唐五代史演義』にはある。歴年図評（つ  
まり司馬光評）として司礼監刊本『節要』には引用されている。
- ② 46 回史臣評……周太祖郭威が崩御した時の史評。誰の史評なのか不  
明。李廷機『歴史大方通鑑』巻 27 五代周総論に引く顧充評に若干似ている  
が。三台館本にはないが、世徳堂本は注に一部を引く。『残唐五代史演義』  
はさらに詳しく引用している。
- ③ 60 回……古虞顧充『歷朝捷録』紀之云。これは宋太祖が即位した時の  
引用。顧充は隆慶（1567—1572）の挙人。この評は『李氏綱鑑』巻 27 五代  
周総論にも引用されている。

このうち、③は顧充が嘉靖の熊大木よりは後の人であるから、『南宋志伝』が  
完成し流伝する過程で誰かが増補したものである。呉璿が増補したのかもしれ  
ないが、それについて確かめることはできない。②は世徳堂本には眉欄に評と  
して部分的に存在するから、恐らく『南宋志伝』の原本では全部引用されてい

たと思われる。呉璿が見た『南宋志伝』は②の注がきちんと引かれている（あるいは①③も）テキストであったに違いない。

しかし、呉璿はなぜ当時の平話と『南宋志伝』とを一つの作品の中に混在させるという杜撰な編纂をしたのか。これは全く想像にしか過ぎないが、乾隆年間、ある書肆が『南北宋志伝』を手に入れてこれを出版する計画を立てていた。しかし、既に見てきたように『南宋志伝』は講史小説草創期の作品であり、文章もあまり読みやすくない。そこで当時の飛龍平話を持ち出してきて呉璿に編集を依頼した。呉璿の自序に出てくる友人とは実は書賈であったかもしれない。飛龍平話には後半部分に欠落でもあったのか、あるいはその続編の『北宋志伝』につなげるために意図的に後ろの方に『南宋志伝』の原文を残したのか、いずれかの事情で（たぶん後者ではないかと思うが）二つの小説を組み合わせた現在の『飛龍全伝』が作られた。

このような想像をする根拠は、『飛龍全伝』の最後に、「從此天下大定，仁明之主，永享太平。『飛龍伝』如斯而已終。但世事更変，難以逆料，要知天下此後誰継？当看『北宋金鎗』，便見源委也。」という宣伝文句があるからである。『飛龍全伝』の刊行者（あるいは編者が）が続きの『北宋金鎗』も読んでくれと宣伝をうったのであろう。清代において『南北両宋志伝』が『南宋志伝』と『北宋志伝』に分割されて販売され、そのうち『北宋志伝』は『北宋金鎗全伝』と名前を変えた。大塚目録には道光2年博古堂刊本を載せるが、あるいはもっと早い刊本があったかもしれない。ちなみに『北宋金鎗全伝』は更に楊家将と天門陣演義十二寡婦征西との二つに更に分割される。これは同治あたりからのようである。『北宋志伝』については次章で論ずるが、『南宋志伝』に比べ内容はかなり虚構性に富み、史実に負うところが少ない通俗的な作品であったため、清代以降も殆ど手を入れられることはなかった。明代の講史小説で清に入ってから改編されなかったのは、この『北宋志伝』と『残唐五代史演義』くらいのものであり、かたや『南宋志伝』は改編の洗礼を受け『飛龍全伝』として面目を一

新し、ここに趙匡胤物語の流布本が誕生したのである。

## 小 結

宋元の間、講唱文学や戯曲のジャンルで育まれた趙匡胤の物語は、『飛龍記』などの題名で早くから出版されていた。明代中葉でも元の『全相平話』がなお読まれていたように、『飛龍記』も当然残って書物として流通していた筈だが、それらは今は全て散逸してしまったようである。明代嘉靖年間、建陽の熊大木は宋代の故事を扱う講史小説を編集しようとする。この企画はあるいは『大宋中興通俗演義』の場合のように、建陽の書林清江堂楊湧泉から持ち込まれたものであったかもしれない。熊大木は、『綱目』に拠って作られた『五代史平話』を『綱目』のかわりに利用し、これを軸に構想を組み立て、『五代史平話』の叙述の間に飛龍平話を割り込ませる形にしてこれを「南宋王趙匡胤」を主人公とする小説に仕立てた。そして、趙匡胤が即位した後は『節要統編』系統から引用した記事を増補し、また楊家将平話の物語も少し引用してこの原『南宋志伝』の中に入れた。『統綱目』に由来すると思われる文字が若干あることから、先に『統綱目』に拠って増補し、後から『節要統編』系の書によって全面的に塗り替えたのかもしれないが、『三国演義』のように各時期の刊本が残っていないためこれはあくまでも推測の域をでない。

講唱文学では皇帝が登極した後は普通描かれないものだが、そこをわざわざ『節要統編』系統で補ったり、楊家将物語を混ぜたりしているところを見ると、熊大木には原『南宋志伝』を編集する時から続きにあたる『北宋志伝』も編集する構想があったようである。この他、熊大木は詠史詩を挿入し、特に『唐書志伝』などと同じように周静軒詩をこの中に入れている。これだけだと熊大木は各書の切り張りだけをしていたようだが、会話や戦闘場面などをある程度補って読みやすくしたのは熊大木の功であろう。原『南宋志伝』は嘉靖30年前後に成立したと推定されるが、その後も度々版を重ね、現在残っている中で最

も古い三台館本や世徳堂本は万暦20年代に翻刻されたものである。しかし、熊大木のほかの小説が全て明末清初に改訂されたように、『南宋志伝』も清朝乾隆年間に大幅に改められることになる。呉璿という人物によって、ほぼ四分の三が乾隆当時の語り物のテキストに拠って差し替えられたが、『飛龍全伝』中の飛龍故事の主なプロットは既に『南宋志伝』の中に出そろっており、乾隆の飛龍平話は恐らく嘉靖年間の飛龍平話と同根から生じたものに違いない。『南宋志伝』中の飛龍平話は、神魔小説的な要素や俠義小説的な要素が混在しており、様々な物語が未分化の状態に残っていたため、『三国演義』、『水滸伝』などに似た部分が随所に見られる。『飛龍全伝』の飛龍平話はそうした傾向がより増幅されているが、これは『南宋志伝』の後に出た『西遊記』、『水滸伝』などの小説の影響を被った結果であったかもしれない<sup>(9)</sup>。しかし、嘉靖『南宋志伝』と乾隆『飛龍全伝』の飛龍平話双方に共通するのは、主人公がいずれも神の生まれ変わりであったということである。『南宋志伝』では郭威が黄龍、趙匡胤が金龍であったが、周世宗や鄭恩らもその素性を迎れば本当は天神だったであろう。英雄がもともと神であったという“劍神”説話は小説の地位の向上に伴い、荒唐無稽なものとして嫌われ徐々にその姿を消していくが<sup>(10)</sup>、周世宗らもその犠牲者であったのかもしれない。『飛龍全伝』では趙匡胤は赤鬚龍、鄭恩は黒虎財神星、周世宗が黄龍、周太祖が烏龍ということになっている。乾隆の飛龍平話は講唱文学の世界で培われたものであったので、“劍神”説話という点に関していえば『南宋志伝』よりも古態を留めているということになる。大半を書き改めた『飛龍全伝』であるが、その後ろの方には、『五代史平話』や『節要統編』に基づいた『南宋志伝』の中でも比較的史実に近い部分が残っている。これは恐らく意図的な編集であろう。そもそも『五代史平話』の作者や熊大木が目指したものは史実に即しなおかつ読者の興味をそそるような啓蒙的な歴史演義であった。『飛龍全伝』に見える史書の痕跡が意味するものは、荒誕な英雄伝奇小説ばかりを追っかけている乾隆時代の書肆に対する知識人側からのささやかなレジスタ

ンスだったかもしれない。

- 1 馬幼垣「中国講史小説の主題與内容」（『中国小説史集稿』時報文化出版企業有限公司1980所収）。
- 2 孫楷第『日本東京所見小説書目』卷3明清部2，43～46頁。
- 3 馬力「『南北宋志伝』与楊家将小説」（『文史』12，1983）269頁。
- 4 戴不凡「『五代史平話』的部分闕文」（『小説見聞録』浙江人民出版社1980所収）。
- 5 伊維德（W.L.Idema）「南宋伝與飛龍伝」（『中国古典小説研究專集2』聯經出版事業公司1981所収）206頁。
- 6 注5前掲論文210～211頁参照。
- 7 孫楷第『中国通俗小説書目』卷2明清講史部《飛龍全伝》：「按：清乾隆間清涼道人聽雨軒筆記三餘紀引評話有飛龍」。
- 8 孟慶錫「『飛龍全伝』校点後記」（『飛龍全伝』人民文学出版社1981排印本所収）参照。
- 9 これについては石育良氏が『中国古代小説百科全書』（中国大百科全書出版社1993）の『飛龍全伝』の項で既に指摘している。
- 10 中国民間文学の英雄「劍神」については、金文京「関羽の息子と孫悟空（上）（下）」（『文学』54巻6・9号1986），大塚秀高「小説と物語（続）—物語の構造と変貌—」（『中国古典小説研究動態』第5号1991）等の詳しい先行研究がある。